

第2章

教育方法：PBLの概要

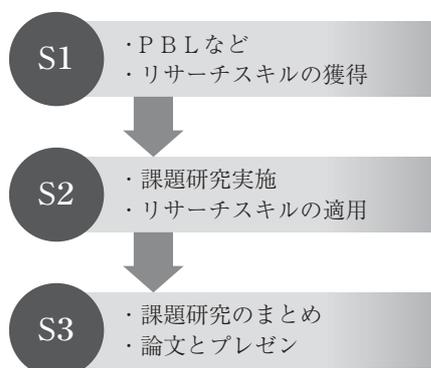
佐 光 美 穂

今年度より、高校一年生の総合人間科でPBLを導入した。なお、Project Basedではなく、Problem Based Learningである。本校で実施するPBLについて、ここでは以下の項目に沿って説明する。

- ・ 高校3年間の総合人間科学習コースの中での位置づけ
- ・ 学習の目標
- ・ 対象学年と指導体制、学習形態
- ・ 学習の展開
- ・ 今後の課題

(1) 高校3年間の総合人間科学習コースの中での位置づけ

三年間の総合人間科は、概ね次のような形で進む。



PBLは課題探究の方法を実践的に学ぶためのプログラムとして、1年生の後期に配置した。高校1年生の学習の中でも中核となる。ここで身につけたスキルを、2年次以降の学習で使って活動する。そのため、3年間の学習の中で基盤となるプログラムである。

なお、三年間の主な学習内容と時期は次の表の通りである。

学年	時期	学習内容
S1	4～9月	6領域に関するキーワード収集 課題解決のための手法の学習 文献調査の手法（探し方、読み方、記録の作り方）

学年	時期	学習内容
	10～12月	PBL 1 （課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ） 教員から与えられる課題を3か月で解決・達成する学習
	1～3月	PBL 2 （課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ） 生徒は1とは違う教員の許で学習（教員は同じ課題を指導する） 情報マップ作成（個人テーマに関わる文献調査のまとめ）
S2	4～7月	領域別個人テーマ探究学習 1 課題設定→課題解決（調査・検証）→ミニレポート ここで出た課題を次のクールのテーマにして良い
	9～12月	領域別個人テーマ探究学習 2
	1～3月	領域別個人テーマ探究学習 3
S3	4～9月	研究のまとめ 1 S2時のミニレポートをもとに追加調査をし、論文化
	10～12月	研究のまとめ 2 論文を元に発表会

(2) 学習の目標

課題研究活動に必要なリサーチ・スキルや、リサーチ・リテラシーを実践的に身につけさせることを目標とする。研究課題の把握から調査、まとめに至る課題研究の流れを、協同学習で一通り経験することによって、次年度以降一人一人が自立して課題探究ができるようになることを目指している。

本プログラムを通して生徒に身につけさせたい手法は、具体的には以下の通りである。

- ・ 資料の探し方
- ・ クリティカル・リーディングの方法
- ・ 研究計画の立て方
- ・ 各種調査方法（文献調査、インタビュー、アンケート、観察などの現地調査など）
- ・ レポートのまとめ方

(3) 対象学年と指導体制、学習形態

本プログラムは、高校1年生120名全員を対象として実施する。授業は原則として、隔週木曜日の午後、2時間連続で実施した。

指導は高校1年の学年担当の教員6名が担当する。今年度は、生徒は20人を標準数とするグループに分かれ、それぞれに1名ずつ教員がついて指導に当たった。なお、グループ編成は、教員が研究テーマを作って提示し、生徒の希望に基づいて行った。

6つのグループに分かれた後は、次項で提示する過程に沿って協同学習を行った。グループ内部で、学習の展開に従って、さらに小グループやペア、必要に応じ個人での活動を組み合わせた。どの時期に、どのような単位で学習すると効果的かは学習テーマに左右される部分もあるので、グループ担当教員の裁量に任せた。

プログラムはSGH推進委員会から提示し、それに沿って学年の教員が指導した。各グループ共通のワークシートは委員会が作成して提供した。一方、学習課題は、学年団の教員それぞれが作成した。

2015年度のグループ別学習課題は次の通りである。

発展途上国の貧困を打開する方策とは？
2020年東京オリンピックで日本はどんな「おもてなし」をするのか？
「同性婚」は社会に受け入れられるか？
現在から未来のエネルギー資源
リニア新幹線が私たちの地域や暮らしに与える影響
自分が生活する地域を外国人が訪問しやすくするために必要なことを探る

(4) 学習の展開

PBL1と2は、それぞれ、次の学習過程を踏んで展開する。

順序	学習過程名	概要
1	課題の分析	教員から与えられた課題を分析し、以下の作業をする。 1 キーワードを定義する 2 課題を解決可能な具体的な問題へ分割する
2	研究計画作成	「課題の分析」の段階で分割した「問題」を一覧し、いつまでに、どの順で実施するか決める
3	第一次問題解決	計画に基づいて調査を実施する
4	第二次問題解決	前段階で新たに生まれた問題や、調べきれなかった問題を解決するため調査を実施する

順序	学習過程名	概要
5	結論	個人でミニレポートを書き、「課題」に対する答えを自分の答えを作る
6	ふりかえり	グループで問題解決の過程を振り返り、研究の進め方や方法論として良かったこと、改善すべきことを跡づける。

協同での問題解決であるため、それぞれの過程が終了するごとに、グループ内で現状報告や、全員が知っていた方がよい情報の共有などをする。

実際の課題解決は、学習課題によって大きく異なる展開になる。そのため、上記で1クールとする課題解決学習を2回行い、違うテーマを学ぶことで異なる調査方法や考え方を学ばせたいところである。また、方法論を学ぶという目的にとっては、テーマを変えて2度経験させることにより、定着しやすくなると考えられる。

(5) 今後の課題

まず、学習時間の確保が必要である。今年度は「グローバル・キャリア・モデル・リレー・シンポジウム」が年度初めに何度か入り、また学校行事（林間学校・学校祭）の準備もあるため、前期の総合人間科で、課題研究につながる活動が少なくなった。年間での学習活動の見直しをつけ、次年度はPBLを2展開できるようにしたい。そのためにも、学校行事の内容や時期などの見直しも必要だと思われる。

また、研究活動のまとめは「ミニレポート」によって行う計画であったが、これは学年から学習成果を共有する機会があるとよいという声もあった。たしかに、発表会などを行うことで、学習集団としての一体感を醸成することも期待できる。上記の学習時間確保ができないと実現できないが、次年度は学習計画に加えることも検討したい。

最後に、今年度は前期の総合人間科の授業時間数が少なく、その分を後期でカバーする形になった。そのため、学年の教員に負担をかける形で、LTの時間を総合人間科に回す窮余の方法を採った。もともと持ち時間に含まれている担任はともかく、副担任にとっては持ち時間にカウントされないボランティアワークとなってしまったことは、改善が必要である。次年度は、副担任も授業時間数にカウントしておけるような教務上の態勢を整えたい。